

新任教員・昇任教員紹介

新任教員

平成26年1月1日付



薬学部准教授
(生命物理学講座)

河嶋 秀和 (かわしま ひでかず)

PROFILE

東京理科大学薬学部薬学科卒業。京都大学大学院薬学研究科医療薬学専攻博士前期課程修了、博士後期課程修了。先端医療振興財団先端医療センター・研究員、京都大学薬学部講師等を経て、本学就任。薬学博士。

昇任教員

平成26年2月1日付



薬学部准教授
(薬学教育支援室)

木村 真一 (きむら しんいち)

PROFILE

本学薬学部薬学科卒業。同大学院薬学研究科薬学専攻修士課程修了、博士課程中途退学。本学薬学部薬理学講座講師、薬学教育支援室講師等を経て准教授就任。薬学博士。

Message

定年退職される先生からのメッセージ



薬学部 教授
富樫 廣子

薬学部の中で最も“若い”病態生理学教室に教授として赴任したのが2005年4月。荷物も届いていないがらんとした教授室の扉を初めてたたいたのは“病態ゼミ”に教室配属が決まったばかりの4年生でした。34年ぶりに薬学部に戻ってきたことを実感した瞬間でした。

入学から卒業まで、5年生の実務実習、6年生の国家試験に向けての受験勉強と、折に触れて成長する学生たちの姿を目の当たりにすることは新鮮な喜びでした。私自身が学生によって、文字通り教えられ育てられてきたような気がしています。教室立ち上げの日々は楽しい思い出です。薬学部6年制施行に向けた教育負担が増すなか、研究の質を如何に維持するか頭を悩ませたこともありましたが、大学院生たちの若さを駆動力として、熱く研究を語りながら退職の日を迎えることができたのは幸せなことでした。

教授在任期間としては9年という短いものでしたが、本学とのご縁は

長く、東日本学園大学時代、当別駅から大学までバスが出ていた頃からです。ほぼ薬学部の歴史と同じということになります。その後も、本学学生たちと一緒に研究をさせていただいてきましたが、当別キャンパスからは足が遠のいていました。久しぶりに訪れた時、JR学園都市線医療大学駅がきき通路によって大学とつながっていることに驚いたことを覚えています。

時代とともに入学してくる学生の気質は変わっても、北海道医療大学を流れる校風ともいべき空気感を私は今も感じています。そんな本学の校風を大切にしつつ、これからの厳しい時代に挑戦し続けて欲しいと心から願っています。

学生との時間はとても楽しく、私を元気にしてくれました。学生コンパは皆勤賞です。お世話になりました。そして、ありがとうございました。



歯学部 教授
有末 眞

昭和49年3月東京歯科大学を卒業後、北海道大学歯学部口腔外科で17年5か月間を過ごし、北大時代の恩師である富田喜内教授からお話を戴き、平成3年9月1日付けで本学歯学部口腔外科学第二講座助教授として赴任しました。

これまで当別へは夏に一度275号線を利用し通ったことがありますが、北大で医療大への転勤の話をする時、多くの方から冬期の当別は吹雪で大学から帰れないこともあるので、食料と毛布は必需品であるといわれました。その後22年7か月間、隣の江別市から車通勤をしておりますが、幸いにも事故や車に閉じ込められたこと、そして大学から帰れなくなったこともなく無事定年を迎えることができました。それにも増して大きな喜びは、北大では数年交代で学生実習を担当しておりましたが、医療大では毎日学生さんと接し、個人的にいろいろ相談にのったり、実習終了後学生

さんと一緒に、調べごとをしたりなど多くの学生さんと親しくなったことです。特に学生さんが質問にきて、最初は自信なげであったことが、「なぜ?」、「どうして?」など質疑応答を繰り返すうち、「解った」と笑顔で眼を輝かせたときは、私も学生さんから多くの元気を戴きました。また卒業試験、それに続く国家試験にパスしその報告にきてくれて、共に万歳をしたことは本当に教師冥利につきました。この感激を与えてくれた学生さんには本当に感謝の気持ち一杯です。定年を迎え学生さんと患者さんを一緒に診たり、症例の検討、口腔外科に関する経験談等いろいろ学生さんと話すなどの機会がなくなることは寂しい限りですが、ともに過ごした学生諸君が自分の母校を誇りに思い全国で活躍されることを祈念しております。

多くの皆様にお世話になり元気に定年を迎えられることができました。ほんとうにありがとうございました。



歯学部 教授
江口 正尊

昭和五十三年三月に東京の駒澤大学大学院人文科学研究科仏教学専攻博士課程単位取得満期退学をした筆者は、若年三十歳になったばかりの同年四月に北海道白糠郡音別町中音別の東日本学園大学教養部講師として赴任しました。

白糠町から朝・昼・夕方、一日バス三本しか通わないそこには国道を挟んで山側に校舎・グラウンド・体育館・一学生寮、海側に二学生寮・教員住宅があるのみで、その場所に立った瞬間くええっ、絶句!>をしてしまいました。しかし、既にそこには薬学部四期・五期、歯学部一期の学生が全く同じ環境のもと、生活をしていたのです。自ら選んだ「教師」という立場を改めて回想し、その日からくよし!自分は彼らの兄貴分として頑張るぞ!>と言い続け、先ず、野球部を結成し彼らと共に練習・試合・遠征・コンパ……、最高の思い出です。七年間はくアッ!>という間に過ぎましたが、六十五歳の今でも、音別のいろいろなことが脳裏を駆けめぐります。

昭和六十年九月、音別校舎を閉校すると同時に当別キャンパスへ移行しましたが、この頃より本学の教育上の要請を受け、医療人育成の基

盤教育、即ち、<学生力・人間力アップ!>を目指した開講科目に専門の仏教教育学を根拠にした医療倫理学・死生学・宗教学・患者学・人間学等という講義を担当させて頂き、薬学部・看護福祉学部・心理科学部・リハビリテーション科学部・歯学部、そして歯学部附属歯科衛生士専門学校の教壇に立ちました。また、平成十一年四月から同二十三年三月までの十二年間、歯学部学生部長という重責を押し、更に、平成二十二年四月から同二十四年三月までは全国私立歯科大学学生部(課)懇談会会長として数多くの諸先輩・学生にご指導・ご協力を頂きました。実は、<学生大好き人間!>を自負する根拠はここにもあります。<学生無くして教師なし!>を実感したからです。

平成六年には校名の変更もありましたが、ここ当別の北海道医療大学にて二十九年が経ち、本年三月末日をもって三十六年間に互り教鞭をとらせて頂きました本学を定年退職致します。余りに長い間多くの人々からご接化・ご法愛を頂きながらこの日を迎えられたことは身に余る光栄と申し上げるしかありません。有り難うございます。

定年退職される先生からのメッセージ



看護福祉学部 教授
野川 道子

1992年4月に本学に講師として赴任し、翌1993年4月の看護福祉学部の開設を待って看護学科、成人看護学講座に配属となり、22年間でたちました。それまでは、臨床で助産師、または看護師として働いていたので、本学が教員としてのスタートでした。

看護福祉学部1期生との出会いは鮮烈でした。彼らには先輩学生というモデルがなく、看護教育は、専門学校から大学教育に移行したばかりの黎明期にありましたから、学生も教員も初めて体験することが多く、良くも悪くも、ひたすらもがいていました。そして、1期生が卒業を迎えたときは、色、味、形のどれをとってもふぞろいの林檎を育ててしまったと思いました。

しかし、最近、驚くのは、1期生、2期生の臨床での活躍ぶりです。医療大の卒業生は快活で、たくましく、チームワークを大切にしますので、臨床で大成するという評価をいただくことが多いのです。リーダーとなる人、認定看護師や専門看護師などスペシャリストも確実に増えてきました。

今思うのは、粒ぞろいの林檎などという画一化をはからず、学生の個性を愛する教育が、看護福祉学部には根づいていており、人をハッピーにする、いいあんばいの林檎を出荷できているのだと思います。

また、私はこの大学で、病気の不確かさという研究テーマに出会うことができました。病気になると行く末が見通せず、確かな情報や将来を求めたくなります。しかし、実は、この世の中に、一つとして確かなものはなく、すべてのものは非線形に揺らぎながら変化しているのです。これまで、学生のこと、学部運営のこと、研究のこと、カオスに陥ったこともありましたが、身も心も大きく揺れ動かされた日々が、今は一番の思い出です。

気がついたら自分の好きなことに熱中している私につきあってくれた学生、同僚の先生、職員の方がいたから、無事定年を迎えることができました。素晴らしい日々をありがとうございます。心から感謝いたします。



看護福祉学部 教授
花岡 眞佐子

1993年4月、看護福祉学部の開設と同時に助教授として赴任し、この3月末でちょうど21年になります。これまで大きな事故もなく、健康に過ごせたのは、多くの皆様からのご指導ご支援のおかげと、深く感謝しております。この紙面を借りて、私を支えてくださいました教職員および卒業生の皆さんにお礼を申し上げます。

看護福祉学部の開設時は、入学式、宿泊オリエンテーションが終わると同時に、私たち実践基礎看護学領域は1年生の授業がスタートし、教員同士はもちろん、学生との交流も充分でない状態からすべてが始まりました。見知らぬ人々との空間の中で、時間だけがあわただしく過ぎた…と、当時、私の教育歴は17年でしたが、看護専門学校と看護短期大学の教育経験であり、3年間の看護師養成教育に限界を感じていました。ですから、4年間の高等教育で学生さんはどのように変化するのだろうか、教師は看護学という学問をどのように教えるのだろうか…と不安が渦巻いていました。当時の上司であった池川清子先生（元神

戸市看護大学学長）は、ご自身の著書『看護-生きられる世界の実践知-』にもとづいて、人間的対象とする看護学を解き明かしてくださいました。私はその授業に参加して、改めて「看護実践の教育プログラム」という研究テーマを自覚することができました。

また、男子学生に看護学を教えるのも初めての経験でした。5期生（1997年入学）は4名でしたが、それ以外は毎年10名から15名の男子学生が入学してきました。開設当初は、教室の一番後ろ一列に並んだ男子学生が何となく気になりつつ授業を進めましたが、現在は女子学生の中に混じる形で着席し、私も学生も男女共学に慣れてきたように感じます。

この3月に看護福祉学部の18期生が卒業します。この数年間、大学院や認定看護師研修センターに卒業生が戻ってきました。次世代の教員のもとで、看護福祉学部および看護福祉学研究科がさらなる発展をとげること心から願っております。



心理科学部 教授
小野 滋男

1985年4月に音別の教養部に赴任して以来早いもので29年たちました。わずか4ヶ月強で当別へ移転し、また8年前にあいの里に移籍しましたので、本学では珍しい移動の体験者となりました。この間、教養部の改称、校名の変更、学部分属（当初看護福祉学部）を経験し、8年前から心理科学部言語聴覚療法学科に所属と、これまで余り例がないことだと思います。この間担当した科目は、人間学や医療哲学と一時変えたものの哲学を主軸とし、さらにドイツ語を15年間担当しました。近年は、全学基礎科目の哲学、医療倫理の他、教職科目（福祉哲学）、言語聴覚療法学科で卒業研究のゼミ（専門職倫理）を担当してきました。これに看護福祉学研究科の看護倫理もあわせると、長いこといろいろな科目をもってきたと正直驚いています。

ただ長いだけで、何やら慌ただしい限りの私の本学での教員生活ではありましたが、同僚、学生をはじめ多くの方たちに支えられ、今日までやってこられたものと感謝申し上げます。

かつて医療系大学への赴任という不安を口にした私に、一人でも講義を聴こうとする学生がいる限り、全力を尽くせと背中を押して下さった印具徹先生（元聖母被昇天学院女子短期大学長）の師恩に深く感謝するものです。この29年間、悩み多き教員、学究生活のなか、荒れ狂う航海のいわば羅針盤となりました。先生からの手紙の最後に必ず書き添えられた「神のご加護を」という言葉を、先生の愛情深い眼差しと共に今も忘れることはできません。

恩師のように、学生たちを本当に愛情深く見守り、その導き手となったのか、疑わしい限りではありますが、それにもましてこれからも多くの人々との交流のなかで、共に歩み、成長してゆけたらよいと思います。哲学の基本的な姿勢を失わず、これからも問い続け、思考し続けてゆく所存です。

最後になりましたが、皆様のご健勝、ご多幸を、そして本学のますますのご発展をお祈り申し上げます。



看護福祉学部 准教授
佐々木 明員

以上の諸先生の他、看護福祉学部臨床福祉学科に6年間在職されました、佐々木 明員准教授が定年により退職されます。ありがとうございました。

With heartfelt thanks,